

# 学力評価の新たな地平へ：埼玉県学力・学習 状況調査が拓く、教育のパラダイムシフト

静的な「学力」から、動的な「伸び」を可視化するデータ活用へ



# 従来の学力調査が抱える課題：「一点」の学力だけでは、真の姿は見えない

## 単年度の平均点比較の限界

- 問題の難易度が異なれば、単純な比較はできない。
- 集団の学力が向上したのか、問題が易しかったのか、区別がつかない。

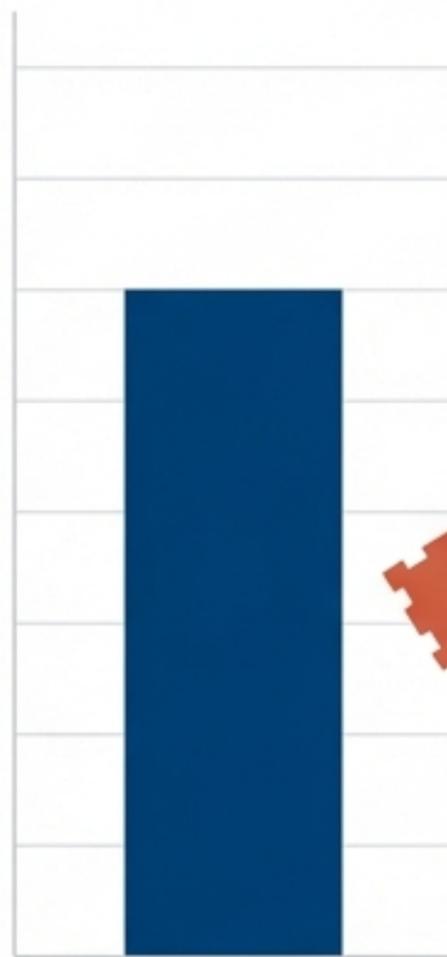
## 「なぜ」が分からない

- 学力が高い、あるいは低いという結果は分かっても、その背景にある学習習慣や意欲などの要因までは把握できない。

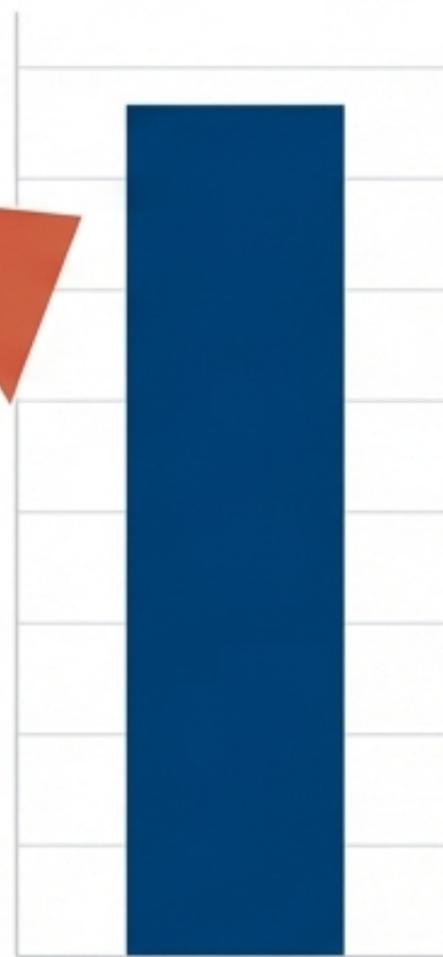
## 結果として

- 指導改善の具体的な方策に繋がりにくい。

2022年度  
平均点



2023年度  
平均点



# 課題解決への挑戦：一人ひとりの「伸び」に寄り添う 「埼玉県学力・学習状況調査」

## 調査の概要



対象：小学校4年生～中学校3年生



開始：平成27年度



内容：



教科に関する調査（国語、算数・数学、英語）



学習や生活に関する質問紙調査



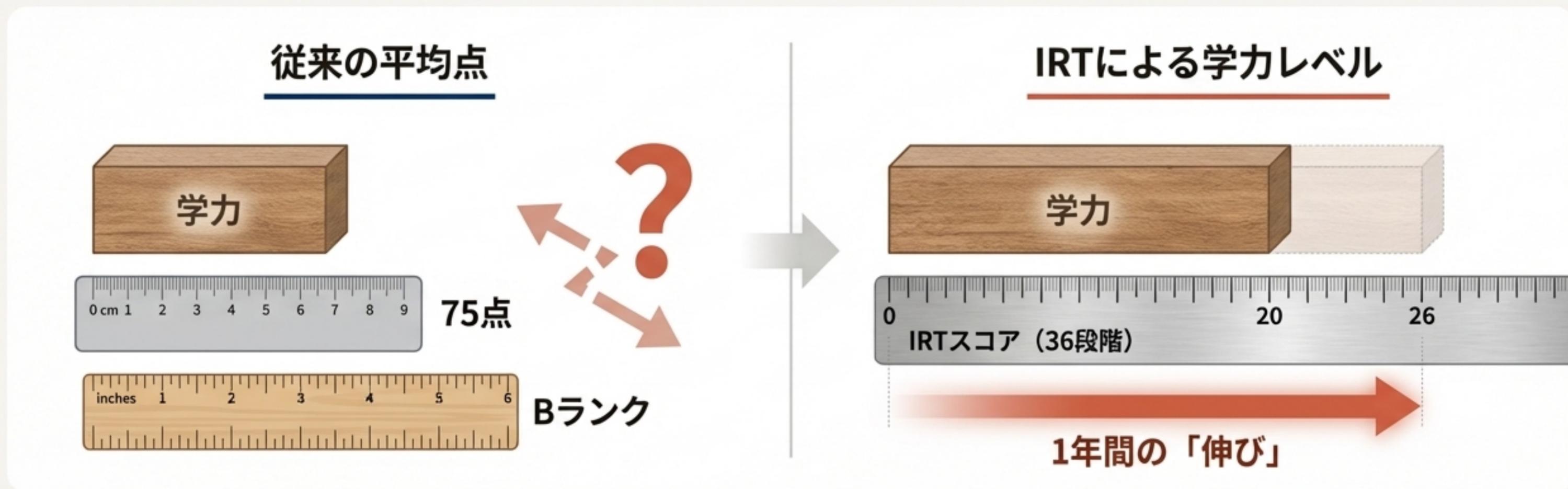
学校・教育委員会への質問紙調査

## 推進する教育

- 目的：教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人ひとりの学力を確実に伸ばす教育を推進する。
- 最新の取り組み：令和6年度より**CBT**（Computer Based Testing）を全面導入。解答時間などの**ログ分析**も可能に。

# 特長① 学力の「伸び」を可視化する、より正確な「ものさし」

異なる年度の学力を、同じ尺度で比較することを可能に。



## How it Works: IRT (項目反応理論) の採用

- 受験者の正答・誤答パターンから、問題の難易度や受験者の能力を統計的に分離して推定。
- これにより、テスト問題の違いに左右されない、一貫した「学力レベル (36段階)」を算出。

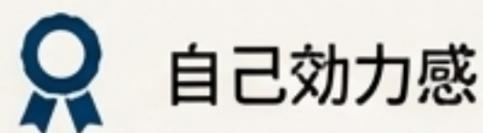
The Result: 個々の児童生徒や学校全体の、1年間の学力の「伸び」を正確に把握できる。

## 特長② 学力を動かす「エンジン」を測定する：非認知能力と学習方略

学力テストでは測れない、学習の土台となる力を数値化し、学力との関連を分析。

### 非認知能力

“自分の感情をコントロールして行動する力など、性格的な特徴”



自己効力感



自制心



やり抜く力



勤勉性



向社会性

### 学習方略

“学習効果を高めるために意図的に行う活動”



柔軟的方略



プランニング方略



作業方略

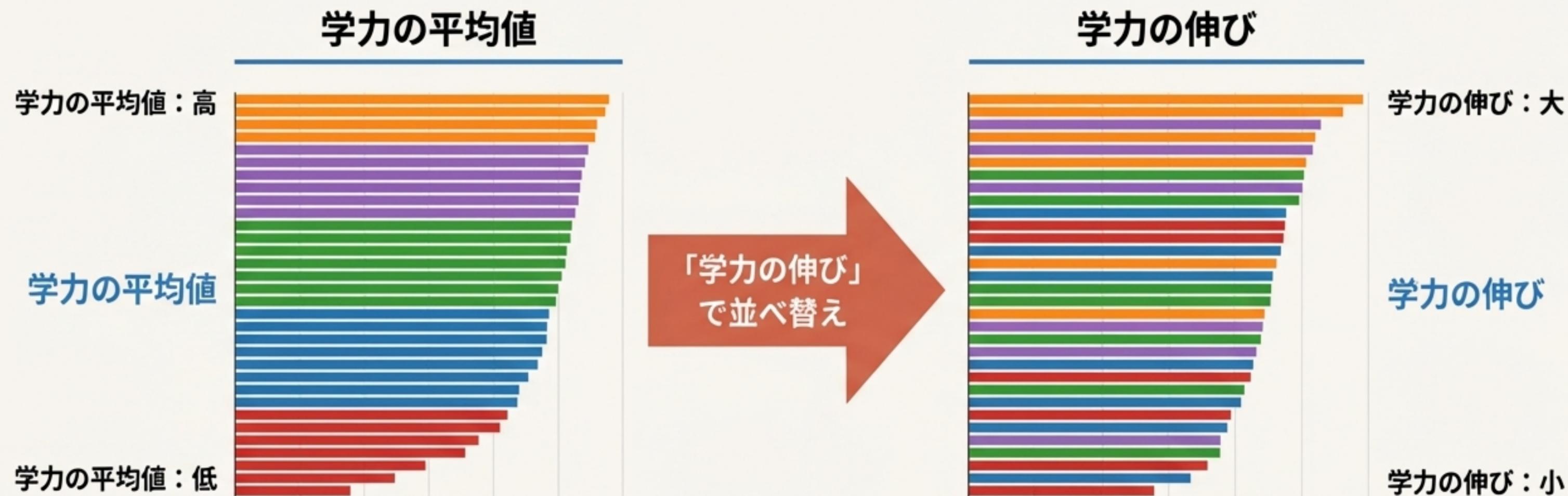


認知的方略



努力調整方略

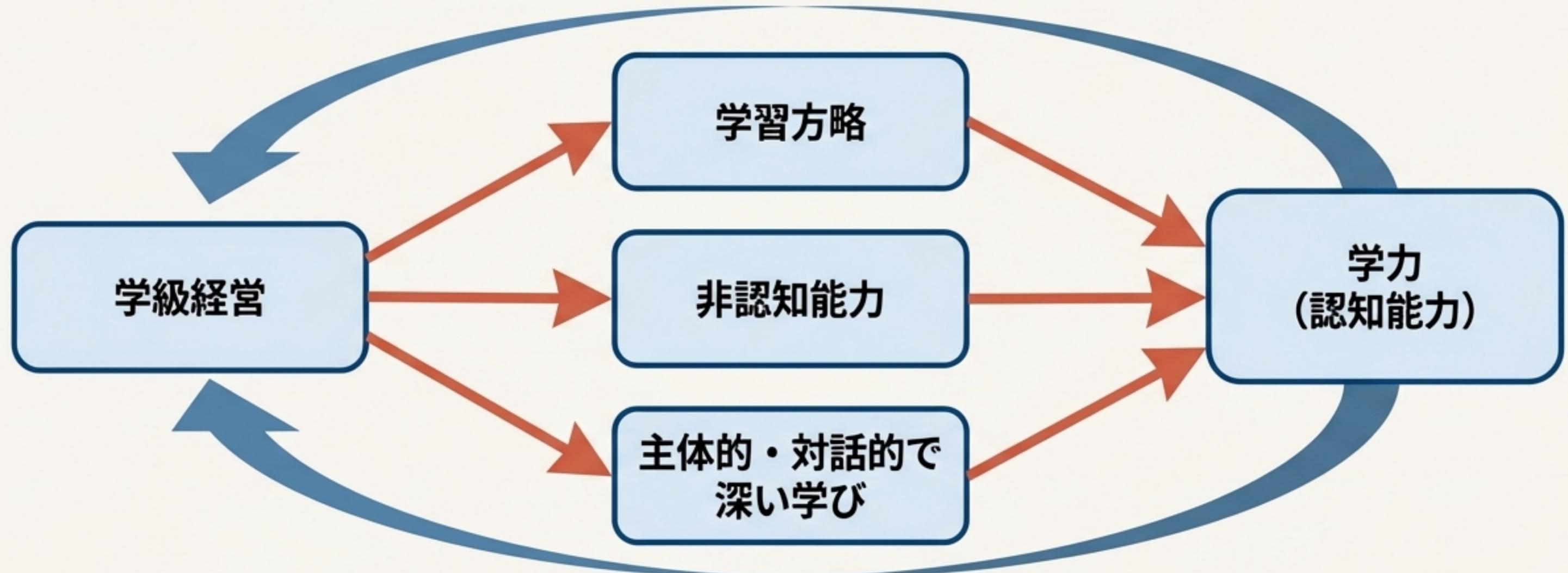
# 発見①：「学力が高い学校」が、必ずしも「学力を伸ばしている学校」ではない



- 従来の指標である「学力の平均値」で学校を並べた場合と、埼玉県の調査で可能になった「学力の伸び」で並べ替えた場合、その順位は大きく変わります。
- これは、学力の現在地に関わらず、全ての学校・児童生徒に「学力を伸ばす」可能性があることを示しています。

## 発見②：「学級経営」が非認知能力を育み、学力向上へと繋がる

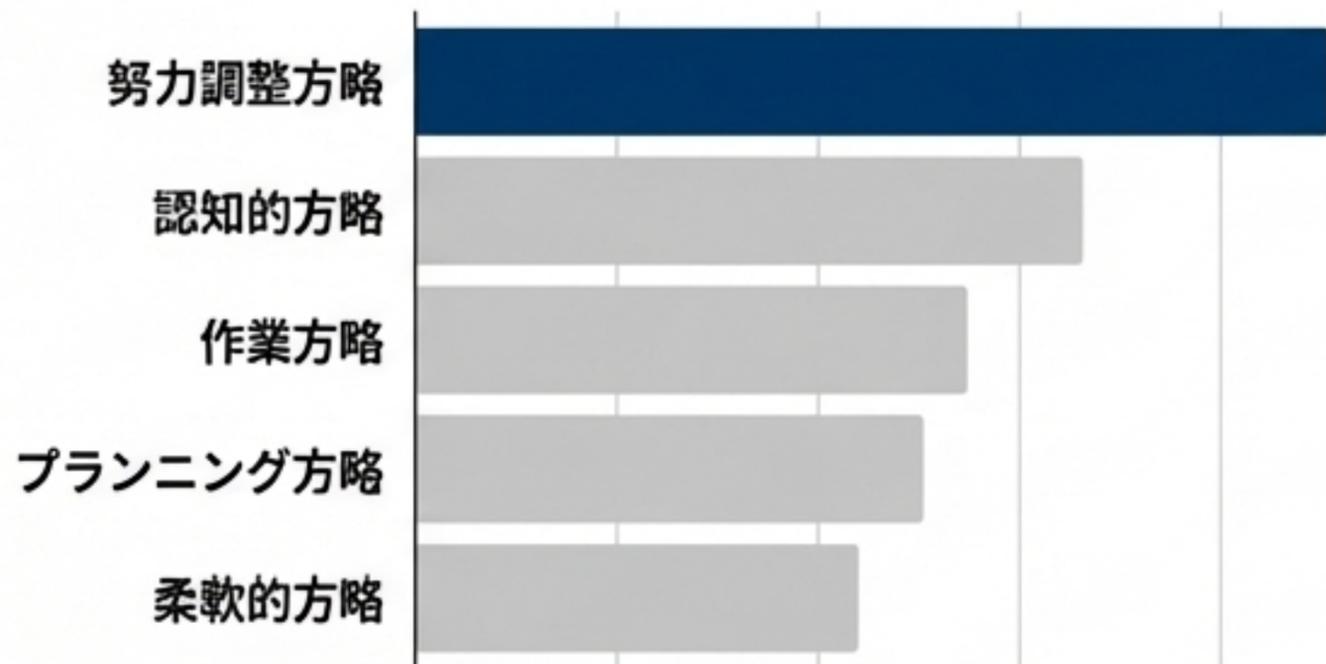
- データ分析の結果、「主体的・対話的で深い学び」の実践に加え、安定した「学級経営」が、児童生徒の非認知能力や学習方略を向上させる重要な土台であることが明らかになりました。
- この好循環が、最終的に認知能力、つまり「学力」の向上に結びつきます。



# データが示す指導のヒント：学力の「伸び」と最も相関が高いのは「努力調整方略」

- 重回帰分析により、どの学習方略が学力の「伸び」に強く影響するかを調査。その結果、全ての学年・教科で「努力調整方略」が学力の伸びと相関が高いことが判明しました。
- **努力調整方略とは**：苦手なことでも諦めずに取り組む、粘り強さや工夫する力。

## 学習方略と学力の「伸び」の相関



この力を育むための、**日々の声かけや振り返りの充実が重要です。**

# 分析は新たな次元へ：CBT化がもたらす「解答ログ」という新データ

- 令和6年度からのCBT全面導入により、従来の正誤情報に加え、各問題への「解答時間」や「見直し時間」といったプロセスデータを取得・分析できるようになりました。



- これにより、児童生徒が「所の方」問題取り返さないか、思考の過程を垣間見ることが可能になります。

- これにより、児童生徒が「どのように」問題に取り組んでいるか、その思考の過程を垣間見ることが可能になります。

# 解答ログ分析の成果：「見直し」を促す鍵は、作業方略と自己効力感

見直しを行う児童生徒は、正答率が高い。

## 【作業方略】

ノートに書く、声を出すといった、作業を中心に学習を進める活動

さらに児童生徒質問調査との関係について分析した結果

- **作業方略**の数値が高い児童生徒ほど、見直しを行っている。
- **自己効力感**の数値が高い児童生徒ほど、見直しを行っている。

## 【自己効力感】

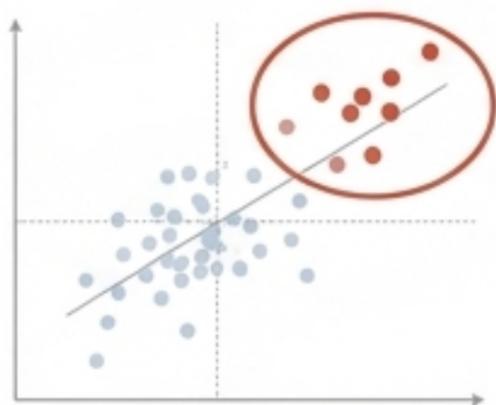
自分はそれが実行できるという期待や自信

見直しを習慣化させるためには、  
作業方略や自己効力感を高める取組が重要



# 優れた実践を、県全体の財産に： 好事例の横展開による指導技術の共有・普及

 **把握**  
(Identify)



IRTによる「学力の伸び」データを用いて、優れた実践を行っている学校や教員を客観的に把握します。

 **可視化**  
(Visualize)



その教員の授業を撮影し、大学教授など専門家の解説を加えた映像教材を作成します。

 **共有**  
(Share)



作成した動画を県のウェブサイトで公開し、校内研修などで活用。県全体の指導力向上に貢献します。

# データが駆動する、教育改善の好循環

埼玉県学力・学習状況調査は、一度きりの評価で終わるのではなく、継続的な改善サイクルを生み出しています。



# 新たな教育パラダイムの実現：データがもたらす教育現場の変革

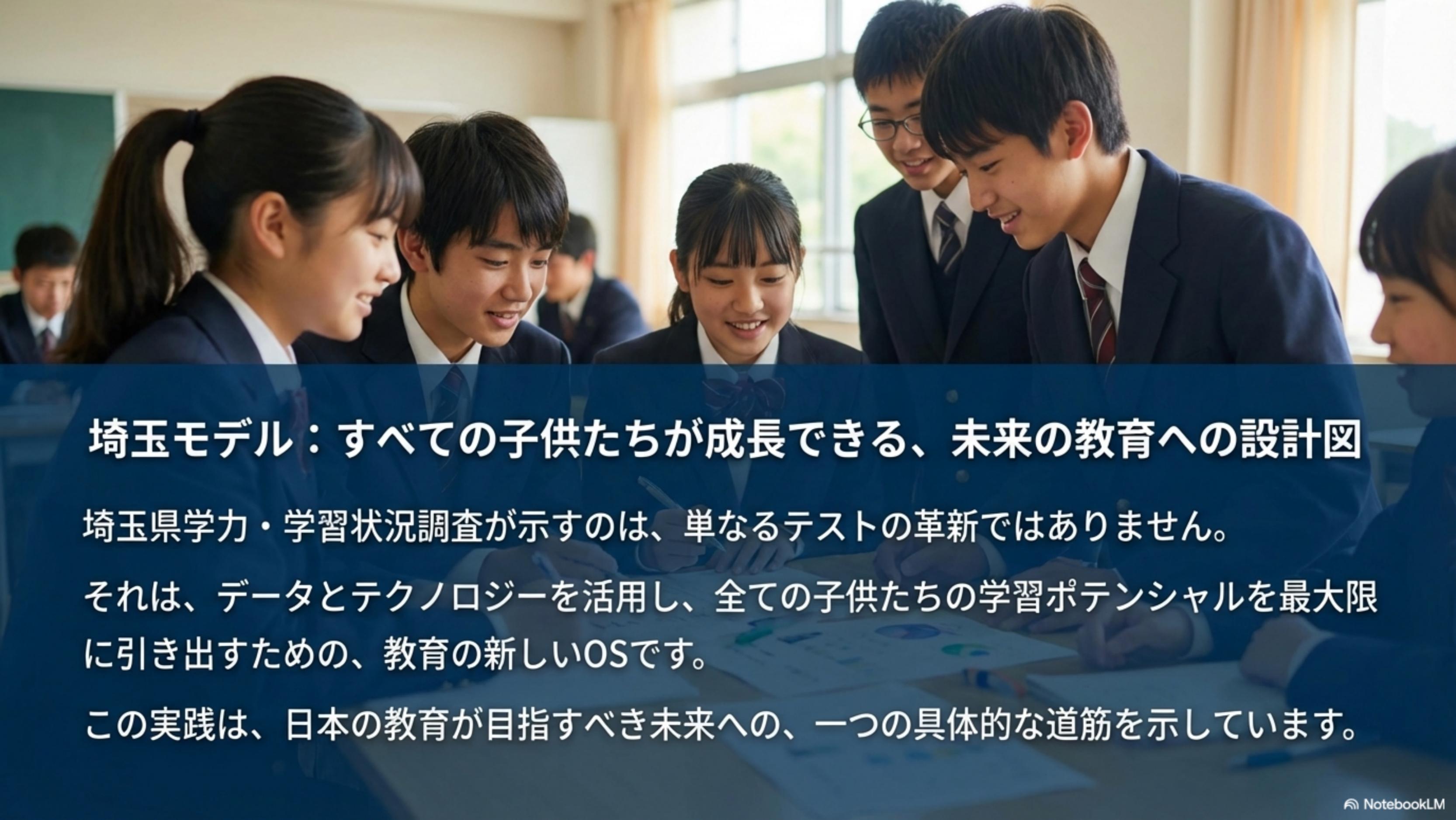
## これまで

- 静的な「平均点」の測定
- 教員の「経験と勘」に依存
- 結果の「評価」で終わる
- 集団としての傾向把握



## これから

- 動的な「伸び」の追跡
- 「根拠」に基づく指導
- 指導「改善」への活用
- 一人ひとりの可能性を伸ばす

A group of Japanese high school students in a classroom, looking at a document together. The students are wearing dark blue school uniforms. They are gathered around a table, looking at a document with interest. The background shows a classroom setting with windows and a green chalkboard.

## 埼玉モデル：すべての子供たちが成長できる、未来の教育への設計図

埼玉県学力・学習状況調査が示すのは、単なるテストの革新ではありません。

それは、データとテクノロジーを活用し、全ての子供たちの学習ポテンシャルを最大限に引き出すための、教育の新しいOSです。

この実践は、日本の教育が目指すべき未来への、一つの具体的な道筋を示しています。